

ある日の先生と子供

小川未明

青空文庫

それは、寒い日でありました。指のさきも、鼻の頭も、赤くなるような寒い日でありました。吉雄は、いつものように、朝早くから起きました。

「お母さん、寒い日ですね。」と、ごあいさつをして震えていました。

「火鉢に、火がとつてあるから、おあんなさい。」と、お母さんは、もう、朝のご飯の支度をしながらいわれました。

吉雄は、火鉢の前にいつて、すわつて手を暖めました。家の外には、風が吹いていました。そして雪の上は凍っていました。

「いま、熱いお汁でご飯を食べると、体があたたかくなりますよ。」と、お母さんは、いわれました。

そのうちに、ご飯になつて、吉雄は、お膳に向かい、あたたかなご飯とお汁で、朝飯を食べたのであります。

「番茶がよく出たから、熱いお茶を飲んでいらつしやい。体が、あたたかになるから。」と、お母さんは、吉雄の、ご飯が終わるころにいわれました。

吉雄は、お母さんのいわれたように、いたしました。すると、ちようど、汽車の汽罐

車に石炭をいれたように、体じゅうがあたたまつて、急に元氣が出てきたのであります。

吉雄は、学校へゆく前には、かならず、かわいがつて飼つておいたやまがらに、餌をやり、水をやることを怠りませんでした。

夜の中は、寒いので、毎晩、やまがらのかごには、上からふろしきをかけてやりしました。そして、学校へゆく時分に、そのふろしきを取つてやったのです。

その日も、吉雄は、いつものごとくふろしきを除けて、かごを出してやりしました。そして、餌をやり、水を換えてやつてから、鳥かごを、戸口の柱にかけてやりしました。

太陽が、いちばん早く、ここにかけてある鳥かごにさしたからであります。けれども、あまり寒いので、鳥は、すくんで、体をふくらましていました。やがて、太陽が、かご

の上をさす時分には、元氣を出して、あちらに止まり、こちらに止まって、そして、もんどり打つてよくさえずるでありましようが、いまは、そんなようすも見られませんでした。

しかし、鳥がそうする時分は、吉雄は、学校へいつてしまつて、教室にはいつて、先生から、お修身や、算術を教わっているころなのであります。

どこか、遠いところで、風のうなる音が聞こえていました。そして、風が、すさまじく、

すぎの木の頂^{きいただきふ}を吹^ふいています。その風^{かぜ}は、また、かごの中^{なか}のやまがらの頭^{あたま}の細^{ほそ}い小^{ちい}さな毛^けをも波^{なみだ}立てました。すると、やまがらは、ますますまりのように、体^{からだ}をふくらませたのであります。

吉雄^{よしお}は、こうしている間^{あいだ}に、餌^{えさ}ちよくの水^{みず}が凍^{こお}ってしまったのを見^みました。彼^{かれ}は、また新^{あた}しい水^{みず}を換^かえてやりまし。凍^{こお}つてしまつては、やまがらが、水^{みず}を飲^のむのに、困^{こま}るだろうと思^{おも}つたからです。

このとき、ふと、吉雄^{よしお}は、さつきお母^{かあ}さんがおいしいなされたことから、「やまがらにも、あたたかなお湯^ゆをいれてやったら、体^{からだ}があたたまって、元^{げん}氣^きが出^でるだろう。」と、思^{おも}いつきました。そこで、彼^{かれ}は、こんど餌^{えさ}ちよくの中^{なか}に、お湯^ゆをいれてきてやりました。

「さあ、お湯^ゆをのむと、体^{からだ}があたたかになるよ。」と、吉雄^{よしお}は、やまがらに向^むかつていいました。

やまがらは、くびをかしげて、不思議^{ふしぎ}そうに、餌^{えさ}ちよくから立^たちのぼる湯^ゆ氣^げをながめていました。そして、吉雄^{よしお}が、そこに見^みている間^{あいだ}は、まだお湯^ゆをば飲^のみませんでした。

吉雄^{よしお}は、学^が校^{っこう}へゆくのが、おくてはならないと思^{おも}つて、やがて、かばんを肩^{かた}にかけ、

弁当を下げで出かけました。

吉雄は、学校へいつてから、友だちといろいろ話したときに、自分は今日くる前に、やまがらにお湯をやつてきたということを話しました。

すると、その友だちは、たまげた顔つきをして、

「君、やまがらはお湯など、飲ませると、死んでしまうぞ。」といいました。

「だって、寒いじゃないか。お湯を飲むと、体があたたまっていいのだよ。」と、吉雄はいいました。

「お湯なんかやれば死んでしまう。君、金魚だって、お湯の中へいれれば死んでしまうだろう?」と、相手の少年は、いいました。

吉雄は、なるほどと思いました。いくら寒くたって、金魚をお湯の中にいれることはできない。そのかわり、たとえ水がおおつても、金魚は、生きていることを、思ったのであります。

吉雄は、たいへんなことをしたと思いました。大事にして、かわいがっていたやまがらを、自分の考え違いから、殺してしまつては取りかえしがつかないと思いました。けれど、どうしてもやまがらにお湯をやつたことを、まだ、まったく、悪いことをしたとは思われ

ませんでした。なんとなく、金魚の場合とは、異つたような気もして、疑われましたので、先生に聞いてみることにいたしました。

吉雄は、一年生で、もうじき二年になるのです。彼は、先生のいなさるところへゆきました。

「先生、やまがらにお湯をやつても、死にませんでしょうか！」といつて、吉雄は先生に聞きました。

「小鳥に、お湯なんかやるものはない。」と、受け持ちの先生はいわれました。

すると、このとき、受け持ちの先生の隣に、腰をかけていた、やさしそうな、やはり男の先生がありました。

吉雄は、その先生をなんといい先生だ知りませんでした。

やさしそうな先生は吉雄の顔を見て、笑つていられました。そして、

「やまがらにお湯をやつたんですか？ どうしてお湯をやつたのです。」と聞かれました。

「あまり、寒いものですから、お湯を飲んで体があたたかになるように、やつたのです。」と、吉雄はきまり悪げに答えました。

「おもしろい。」といつて、やさしそうな先生は、受け持ちの先生と顔を合わして笑

われました。吉雄には、どうしておもしろいのか、その意味がわかりませんでした。

「小鳥は、人間とちがって、お湯を飲んだからって、体があたたまるものではない。」と、受け持ちの先生はいわれました。

吉雄は、どうして、人間と小鳥とは、そう異うのだろう。やはりその意味がわかりませんでした。

このとき、やさしそうな先生は、吉雄の方を向いて、

「小鳥は、山の中や、谷や、林の間にすんでいるのです。そして、どんな寒いときでも、外に眠っています。生まれたときから、お湯を飲むように育てられてはいません。ですから、寒いことも、水を飲むことも平気です。寒い国に生まれた小鳥は、もう子供の時分から、寒さに慣れています。あなたの心配なさるように、寒さに驚きはしません。」といわれました。

吉雄は、なるほどと心に、うなずきました。

また、先生は、

「鳥や、獣は、火でものを焼いたり、水を沸かしたりすることは、知っていません。火でものを煮たり、水を沸かしたりするものは、人間ばかりでありますよ。」といわれまし

た。

吉雄は、なにもかもよくわかったような気がしました。そして、先生たちのいなさる室から出ました。けれど、やはり頭の中に、心配がありました。

「やまがらが、いま時分湯を飲んで、舌を焼いてしまわないか。」と、彼は思いました。

もし、舌を焼いてしまったら、きつといまごろは、やまがらは、苦しんで、死んでしまったかもしれない。こう思うと、彼は、気が気でなかったのであります。

吉雄は不安のうちに、修身の時間を、一時間過ぎました。そして、休み時間になったときに、彼は、いつも、はつきりと先生に、問われたことを答える、小田に向かつて、

「やまがらに、僕は、お湯をやったんだよ。」と、吉雄はいいました。

「お湯をやったのかい。」と、小田は、目を円くして問いました。

「やまがらが、お湯を飲んだら、舌を焼くだろうか。」と、吉雄は、小田にたずねました。

「お湯を飲めば、舌を焼くさ。」

「死ぬだろうね？」

「ああ、死ぬかもしれないよ。」

吉雄は、もう、じつとしていたことができませんでした。さつそく、教室へはいって、荷物を持って帰り支度をしました。

「君、家へ帰るの？」と、小田が、そばにきてたずねました。

「ああ、僕、家へ帰って、やまがらにお湯をやったのを、水に換えてくるよ。しかし、もう飲んでしまつたら、たいへんだね。」と、吉雄は、いいました。

すると、りこうそうな、目のぼちりした小田は、吉雄を慰めるように、

「君、もう飲んでしまつたらしかたがない。そして、いま時分は、お湯は、こんなに寒いんだもの、水になつているよ。帰つてもしかたがないだろう。」といいました。

吉雄は、なるほどと思いました。そして、帰るのをやめました。

この話を、だれか受け持ちの先生に、したものがあります。すると、先生は、みんなの前で、

「小田のいうことはよくわかる。頭がいいからだ。そして、いつまでもお湯が、あつと思つたり、やまがらに、お湯をやるようなものは、頭がよくないからだ。」といわれ

このとき、吉雄^{よしお}は、顔^{かお}を真^まつ赤^かにして、どんなにか恥^はずかしい思^{おも}いをしなければなりませんでした。

しかし、受^うけ持^もちの先^{せん}生^{せい}のい^いったことは、かならずしも正^{ただ}しくなかつたことは、ずっと後^{のち}になつてから、吉雄^{よしお}が有^{ゆう}名^{めい}なすぐれた学^{がく}者^{しゃ}になつたのでわかりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」 講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「童話」

1924（大正13）年1月

※表題は底本では、「ある日《ひ》の先生《せんせい》と子供《こども》」となっていて
す。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ある日の先生と子供

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>